

## &lt; 論 説 &gt;

## パーソナリティ研究におけるマズローの基本視座

三 島 斉 紀  
河 野 昭 三

## I. プロローグ

経営管理学において、心理学者マズロー (Abraham H. Maslow, 1908-70) の提示した「欲求階層説」や「自己実現欲求」は、組織メンバーの動機づけに関する主要な礎石の一つとなっている。彼の学説は、1943 年の論文「動機理論序説 (Preface to Motivation Theory)」と同年の論文「人間動機の理論 (A Theory of Human Motivation)」, および、これら論文がそれぞれ第 4 章と第 5 章に一部改変されて収録されている 1954 年著書『人間性の心理学 (*Motivation and Personality*)』(1970 年の第 2 版では、それぞれ第 3 章と第 4 章に収録) によって、よく知られているところである。

しかしながら、一般的に一つの研究成果をよりよく理解するためには、その研究者の有する対象へのアプローチに関する基本的な考え方 (基本視座) を理解することが要請されるにも拘わらず、マズロー特有のパーソナリティ論が如何なる研究視角にもとづいて構築されたかについては、これまで殆ど顧みられることがなかった。そこで、本稿の主要課題は、同じく 1943 年に発表されたマズロー自身の研究方法に関する論文「パーソナリティ組織の力動性 (*Dynamics of Personality Organization I・II*)」に焦点をあて、パーソナリティ研究における彼の基本視座の特質を明確化することにある<sup>1)</sup>。

## II. 全体論的 - 力動論的アプローチ

マズローは、上記 1954 年著書『人間性の心理学』の「序文」において、「若い時の私ほど、教師と友人に恵まれた幸運な人間はいない」<sup>2)</sup>として、30 名を超える人々に対して謝辞を述べている。就中、ニューヨークの新社会研究学院 (the New School for Social Research) のウェルトハイマー (Max Wertheimer, 1880-1943) とコフカ (Kurt Koffka, 1886-1941) からはゲシュタルト心理学 (gestalt psychology) を、また 1935 年にアムステルダム大学からコロンビア大学の精神医学臨床教授となったゴールドシュタイン (Kurt Goldstein, 1878-1965) からは「全体論と力動論との接合法 (my bridge between the holistic and the dynamic)」を学び、彼の主著『生体論 (*The Organism: A Holistic Approach to Biology Derived from Pathological Data in Man*)』(1939 年; 独語の初版はオランダで 1934 年に刊行) は「私の思考方法に大変深い影響を及ぼし、その影響は今なお続いている」と述懐してい

る<sup>3)</sup>。これらに加え、フロム (Erich Fromm, 1900-1980) やホーナイ (Karen Horney, 1885-1952) 等からは力動心理学 (dynamic psychology) ないし精神分析学 (psychoanalysis) を、ベネディクト (Ruth Benedict, 1887-1948) やミード (Margaret Mead, 1901-1978) 等からは人類学 (anthropology) を、学んだことが記されている<sup>4)</sup>。

このようにマズローの研究視座にはゲシュタルト心理学やゴールドシュタインの生体論、力動心理学、および人類学の考え方が反映されていると考えられ、以下、論文「パーソナリティ組織の力動性」の各節についてそのことを見ることにしよう。

### パーソナリティ研究の全体論的方法

論文の第1節では「心理学的データと研究方法の特質 (The Nature of Psychological Data and Method)」が議論され、心理学研究の在り方として、要素還元主義ではなくホーリズム (全体論) によるべきことが主張される<sup>5)</sup>。研究対象が複雑なパーソナリティ組織である以上、それを単純な原子状態に分解 (還元) して基本データを集めるという従来の研究方法は不適切であるとした。すなわち、マズローの指向する方法は、複雑な全体を単純な部分 (原子) に分解・還元して理解するという伝統的な「要素還元分析的 (reductive-analytic)」方法ではなく、要素には還元できない全体をそれ自体として分析するという「全体-分析論的方法論 (holistic-analytic methodology)」にあった。言うまでもなく、このようなアプローチはゲシュタルト心理学に特有なものに他ならない。

この方法論とは、「まず有機体全体について予備的な研究や理解を行い、次にその全体を構成する部分 (part-of-the-whole) が有機体全体の組織と力動のなかで果たす役割の研究にとりかかること」であり、例えば、自尊心症候群について研究では、被験者個々人が機能し適応している全体的な個人として理解される必要から、まず彼と家族との関係、彼が生活する直接的な文化圏との関係、彼の人生上の主要問題への適応方法、将来の希望、理想、欲求不満、および葛藤などについて探究がなされ、その後でようやく、被験者に対して自尊心に関する質問がなされるという方法がそれである。

### 全体論的-力動論の視点

第2節では、パーソナリティ研究において採られるべき視点として、「一般的-力動的視点 (The General-Dynamic Point of View)」[1954年著書では、全体的-力動論的視点 (The Holistic-Dynamic Point of View) へ題名変更] の必要性が論じられる<sup>6)</sup>。

これに対比される従来の視点は「一般的-原子論的 (general-atomistic)」であり、それは因果関係の考え方 (the causality concept) を内包するために、パーソナリティに関するデータを扱う場合には役立たないとする。換言すれば、世界は本質的に独立した諸実体からなる集合とみなす原子論的視点では、それら実体が常に独立性を保ちながら相互に関係する現象を説明しようとして困

果関係論を用いようとするが、そのような研究方法ではパーソナリティ組織の説明は困難であるとする。なぜなら、パーソナリティ組織は、その活動や結果又はそれに加えられる刺激（原因）から切り離して取り扱うことはできず、部分が変化すると全体が変化するという傾向を持つからにはかならない。これゆえ、マズローは、パーソナリティ研究のアプローチとして、これまでの原子論に代えて、「一般（全体）的－力動論」に立脚すべきことを主張する。このように第2節は第1節の延長にあって、ゲシュタルト心理学の全体論的方法と精神分析学の力動論的方法との「接合」が企図されるのである。

### 症候群：パーソナリティの構成要素

第3節の「症候群概念の定義（Definition of the Syndrome Concept）」では、このように力動的全体として存在するパーソナリティの研究にあたり、マズローは「パーソナリティはどのように組織されているか」が問われなくてはならないとし、その際、パーソナリティを「症候群」という分析概念で捉えようとする<sup>7)</sup>。

症候群は、一般に、一つの原因によって起こる諸症状の複合体を指し、病気や異常を示す個別的な症状を単に一括りにしたものとして用いられる。しかし、マズローにあっては、まず正常あるいは異常という価値観を排除したうえで、症候群を「諸症状が組織化され、相互に依存し、構造化されたグループ（an organized, interdependent, structured group of symptoms）」と認識し、「パーソナリティ組織の類型を示す一般的概念（a general concept which refers only to a type of organization）」として用いる。

すなわち、マズローのいうパーソナリティにおける症候群とは、「明確で多様な特殊性（行動、思想、衝動、知覚等）が構造化・組織化された複合体であり、…（中略）…力動的な‘意味’、表出（expression；1954年著書で追加…引用者注）、‘フレーバー’、機能、目的や目標、と様々に称呼される共通の統一体（a common unity）を有しているもの」として定義される。

ここでいう「心理的意味（psychological meaning）」とは、力動的精神病理学（dynamic psychopathology）において多様な症状が一定の同じ意味を有する場合に使用されるものである。心理的意味の同似性によって、多様な症状は一つの症候群として纏められる（an organized collection of diversities）のである。例えば、寝汗・体重減少・ラッセル音などが複合して結核を意味するように、孤独感や他人から嫌われているという感覚は共通して精神的な不安定を意味するということなどがそれである。

また、マズローは「多様性の中における統一性（unity in diversity）」を表現するために「心理的フレーバー（psychological flavor）」という用語を使用する。例えば、多種多様な食材から作られるシチュー自体が統合的な独自のフレーバー（風味）を持つと同様に、鼻が曲がって目は小さく耳が大きくてもハンサムな人が存在するように、人間には部分だけを見ては分からない特異な全体的統合性が認められるからである<sup>8)</sup>。

さらに、マズローは機能主義心理学 (functional psychology: 統一された有機体は、常に何らかの問題に直面し、その有機体の性質や文化および外的現実が許容する様々な手段に拠りながら問題を解決しようと試みていると考える学派…マズローの説明) の立場を受け入れ、パーソナリティ組織を、直面する諸問題とそれらへの対処法によって理解しようとする。例えば、ある幼児の瘡の虫と他の幼児の遺尿症は共に、拒否という同一状況から生じ、母親の愛情を獲得しようとする目的をもつことなどがそれである。自尊心を獲得し、維持し、防衛するという諸問題に対する有機体をとる組織的な諸応答はすべて自尊心症候群というカテゴリーに入れことができるように、複数の行動が一つの問題に関して、同じ「対処目的 (coping aims)」を持つのであれば、同じ症候群に属するものと考えられる。このように、マズローは、パーソナリティ組織が症候群から成り立つとの考えを提起し、パーソナリティ全体が「意味、フレーバー、目的 ('meaning,' 'flavor,' or aim)」によって特質づけられると同時に、全体の構成部分である症候群もそうした観点から理解されたとしたのである。

マズローは、自らの提示した症候群概念と、ウェルトハイマー、ケーラー (Wolfgang Köhler, 1887-1967)、コフカ等によって主張されたゲシュタルト心理学との類似性について、エーレンフェルス (Christian von Ehrenfels, 1859-1932) の基準を挙げて説明する。すなわち、あるメロディが分割されて複数の人々にバラバラに与えられる場合と、メロディ全体が一人に与えられる場合とでは異なりが生じるように、「全体は部分の算術的合計とは別のもの (the whole is something else than the additive sum of the parts)」とし、また一つのメロディが移調されてもメロディ (作曲家の目的) 自体は変わることがないのと同様に、症候群における症例間の相互置換もあり得るとした。

また、ウェルトハイマーの示した「諸部分の間に明瞭な相互依存性が存在するとき、全体は有意義なものとなる (a whole is meaningful when a demonstrable, mutual dependency exists among its parts)」という命題に関する批判、すなわちゲシュタルト心理学の主な研究対象は有機体以外の組織化現象であってパーソナリティを構成する症候群の場合とは異なるとの指摘に対し、マズローは「ゴールドシュタインが十分証明しているように (この部分の記述は1954年著作で追加…引用者注)」、人間有機体は「(構成部分が…引用者注) 最高度に組織化され相互に依存している (most highly organized and intradependent)」存在にほかならないと反論する。

かくて、パーソナリティを構成する症候群概念が、基本的な対処目的の同一性という観点で定義されることによって、マズローは、「機能主義、ゲシュタルト心理学、目的主義 (目的論ではない)、精神分析者やアドラー学派によって支持されているような精神力動論、およびゴールドシュタインの生体全体論」などが統一される可能性、すなわち「適切に定義された症候群概念は、一般的 (全体論的…筆者注) - 力動論的視点と呼び得る統一的な世界観 (全体論的、機能主義的、力動論的、目的主義的) への理論的基礎となり得る (the syndrome concept properly defined can be the theoretical basis for the unified world view (holistic, functional, dynamic and purposive) which we call the general-dynamic point of view)」と主張する。

## 症候群の力動性

第4節では、前節を受けて、パーソナリティの部分としての症候群は如何なる特質を有するのかが示される。すなわち、「パーソナリティ症候群の諸特徴 (Characteristics of Personality Syndromes) [1954 年著書では副題:「症候群の力動性 (Syndrome Dynamics)」が付加]」として、次の10点が列挙されている<sup>9)</sup>。

- ① 「互換性 (interchangeability)」；一つの症候群に属する諸部分 (各症状) は同じ目的を有するゆえに、部分間の代替可能性があること。
- ② 「循環的決定 (circular determination)」；ホーナイの悪循環概念にみられるように、一つの部分は他のすべての部分に影響を与えると同時に、他のすべての部分からも影響を受けるという循環的な動きが総体的に進行すること。
- ③ 「十分に組織化された症候群は変化に抵抗し自己を保存する傾向のあること (tendency of the well organized syndrome to resist change or to maintain itself)」；例えば、健康であろうとなかろうと、大きな外界の変化があっても、従来の生活スタイルに固執することがよく見られること。
- ④ 「十分に組織化された症候群は変化を経た後、再確立させる傾向のあること (tendency of the well organized syndrome to reestablish itself after change)」；ショックを受けたとしても、それが慢性的でない限り、その影響は通例一時的なもので終わり、元の状態に復元しようとする自発的な調整が見られること。
- ⑤ 「症候群は全体的に変化する傾向のあること (tendency of the syndrome to change as a whole)」；症候群の一部分が変化すると、付随して他の部分も同じ方向で変化するので、症候群の変化はホーリスティックに起きることが多いこと。
- ⑥ 「内的無矛盾性への傾向 (the tendency to internal consistency)」；症候群の中で他の部分と矛盾する部分がある場合には、しばしばその部分を他の諸部分と同じ方向に引き込む作用が働くこと。
- ⑦ 「症候群レベルが極端化する傾向 (the tendency to extremeness of the syndrome level)」；自己保存の傾向とは逆の変化が増大する場合のことで、⑥の傾向のもと、不安定な人は極端に不安定となり、安定的な人は極端に安定的となる場合がよく見られること。
- ⑧ 「症候群が外的圧力によって変化する傾向 (tendency of the syndrome to change under external pressures)」；症候群は外的状況からは孤立していないところから、それに対して反応し変化する場合が多いこと。
- ⑨ 「症候群の変数 (syndrome variables)」；最も重要で明白な研究上の変数は症候群のレベルにあること。例えば、自尊心の強い場合と弱い場合に分けたり、精神的に安定している場合と不安定の場合に分けたりして、症候群の質を考察すること。
- ⑩ 「症候群の表出は文化によって決定されること (cultural determination of syndrome expres-



sion)」；人が生活上の主要な目標を達成する方法は、多くの場合、その人が所属する文化の型に依存し、例えば、自尊心や愛情の表現は所属する文化によって承認された方法を通じて行われるということ。ここには、文化人類学の影響がみられる。

### 症候群内のヒエラルキー構造

第5節の「パーソナリティ症候群における組織化 (The Organization of the Personality Syndrome)」では、組織内部における「重要度にもとづく階層構造 (hierarchies of importance)」と「クラスター化 (clusterings)」が指摘される<sup>10)</sup>。

例えば、自尊心症候群の場合では、その構成部分と考えられる、快楽的な性的態度、意識している恐れの数、短気さ、意識している劣等感の数、様々な状況での困惑さ等を測定相関値の大小によって序列化することができ、また、形式主義、道徳性、慎み深さ、規則の遵守などは一つの同種群 (クラスター) として、別のクラスター (自信、平静、当惑しない程度、大胆さ、恥ずかしさ) とは対比的に纏められ得るということ。

このパーソナリティ症候群における分化は、症候群内での分類可能性を示すものといえようが、その場合「分類の基準」をどのように設定するかが問題となる。原子論的方法によるのでは無数の分類が可能となり收拾がつかなくなるところから、マズローは「分類に関する全体論的原理 (holistic principle of classifying)」を、下記のような、「拡大の倍率」、「症候群内における集中度概念」、および「有機体内部における相互関係の程度」の各項において示す。すなわち、

- ① 「拡大の倍率 (levels of magnification)」では、症候群の諸部分を全体から切り離すことなく、いわば入れ子構造をなすものとして取り扱うことによって、当該症候群を総合的かつ分析的に、同時にその共通性や独自性を効果的に研究することができるとした。あたかも顕微鏡による生物組織の研究で、まず肉眼でプレパラート上の組織をながめ、次に10倍、50倍、さらに可能な限り大きな倍率にすることによって、全体との関係における構成要素の独自性を詳しく調べていくことに喩えられる。マズロー自身が1942年に発表した研究論文によれば、安定-不安定症候群に関しては14個の中箱 (sub-syndromes；下位症候群) があり、14個の中に各々4~10個の小箱 (症状) が入っているとされる<sup>11)</sup>。
- ② 「症候群内の集中度概念 (concept of syndrome concentration)」で、マズローは、症候群と部分症候群、部分症候群と部分症候群、部分症候群と症状とを分類・区別する基準は、全体と部分との間における相関に求めている。内部要素間の相関は、症候群から部分症候群へ、部分症候群から下位部分症候群へ、その下位部分症候群からさらに下位の部分症候群へと、全体から部分へ向かうにつれて上昇していくところから、このような相関の変化は症候群内要素の集中度の変化と考えることができる。
- ③ 有機体内部における相互関係の程度 (the extent of the interrelatedness within the organism)」において、マズローは、ゲシュタルト心理学者ケーラーがゲシュタルトの内部的な相互関係

だけでなくクローズドシステム性を重視した心身物理同型説に対して、人間有機体は外界と相互作用するオープンシステムであり、心理と物理は必ずしも同型的な関連性を呈さないと批判し、有機体内部では諸部分の普遍的な相互関係の現象が存在することを再強調する。

上記3点を要約すれば、パーソナリティ症候群は相互に関連する下位症候群から成るが、それら下位症候群は上位との相関値の大小によって序列化され、そしてその下位症候群もまた相互に関連する諸症状から同様に成り立つとされ、力動的なパーソナリティの部分集合（症候群、下位症候群等）がその内部において一定のヒエラルキー構造にあるとの認識を示すのである。

### 症候群間の関係

第6節では、「症候群間の関係 (Relations Between Syndromes)」の例として、安定性 (security) 症候群と自尊心 (self-esteem) 症候群との関係が取り上げられている<sup>12)</sup>。まず、両症候群の間には正の相関がある程度存在するが、正常人の場合では互いに独立的であることが多いこと、また、特定の人々の間では、低い (or 高い) 安定性と高い (or 低い) 自尊心との併存が見られたり、神経症患者の場合では双方が低い水準で併存したりすることが指摘される。その上で、マズローは、安定性と自尊心のレベルと質について高低に2分類し、4つのパーソナリティ類型を示しながら、両症候群間の関係を指摘する。例えば、高い自尊心と高い安定性の人は、人間的な強さと他人への愛をもつゆえに、他人をはぐくみ親切に庇護する仕方ですらの強さを示す。他方、高い自尊心と低い安定性の人は、他人に対し憎悪心・軽蔑心・恐怖心を抱くゆえに、他人を傷つけ、支配し、不安を和らげようと自らの強さを示す。換言すれば、一つの症候群は独立して存在するのではなく、他の症候群との間に一定の相互関係を有するのであり、全体としてのパーソナリティの在り様はそのような症候群間の関係によって決定されることが示唆される。

### パーソナリティ表現としての行動

第7節の「パーソナリティ症候群と行動 (The Personality Syndromes and Behavior)」では、「個々の行動は全体的に統合されたパーソナリティの一表現であることが多い (Each act *tends to be an expression of the whole integrated personality.*)」という命題が示される<sup>13)</sup>。一般に人間の行動は、パーソナリティの全体的表現としての創造的活動 (芸術活動等) から、パーソナリティとは遊離した自動反応的行動 (極めて純粋な慣習的・文化的行動や反射運動等) に至るまで様々である。マズローは、人間生活にとって重要な行動は、習慣的な自動反応的行動ではなく、むしろパーソナリティ自体に関わる行動であると考え、そうした行動の決定因として (目標や目的を決定するという意味で) 全パーソナリティ症候群 (all of the personality syndromes) を挙げる。しかし、これにとどまらず、文化的背景や直接の外的状況も行動の決定要因であると主張する。すなわち、(目標への方法を決定するという意味で) パーソナリティの特質に影響を与えている文化的背景 (the cultural set-

ting) および (目標や方法の実現可能性を決定するという意味で) 直接の状況 (the immediate situation) がそれである。パーソナリティを、内面から、外的環境から、社会文化的状況から、まさに力動的・全体的な方法において理解しようと企図するものにはかならない (ただし、マズローは、症候群と行動とのより高度な相関を示すものとして、文化的背景の制約を受けることのない「衝動 impulses-to-behavior」の存在を指摘し、それをパーソナリティ理解のために症候群の一つとして扱うことも必要であると述べている)。

### 遊離した反応行動

第 8 節の「遊離した反応行動 (Isolated Responses)」は、1954 年著作および 1970 年著作では削除されている<sup>14)</sup>。人間有機体は重大で未解決の不慣れな脅威や緊急事態に直面すると、それに対しては明瞭に統合的な方法で反応する傾向があるものの、しかし直面する問題が容易でさほど重要でない場合では、統合されたパーソナリティとは遊離した方法で対処する傾向が認められるとした。

### 論理的・数学的表現の困難性

第 9 節の「症候群データの論理的・数学的表現 (Logical and Mathematical Expressions and Syndrome Data)」では、従来からの論理学や数学のシステムは、「すべての集合は補集合を持ち、集合と補集合とは相互に独立し、双方を加えると全体集合となる」という命題のもと一定の有効性は認められるものの、パーソナリティ症候群のデータ解釈においては無力であるとマズローは考える<sup>15)</sup>。なぜなら、症候群はすべての部分が互いに重なり合っているがゆえに、その一部分を切り離して取り扱うことは困難であり、仮にその一部分を切り離すとそれ自身も変化し、同時に他の部分も変化する。それゆえ、そのように変化した諸部分を加算しても、必ずしも元のパーソナリティ状態には戻らないからである。このように、原子論的 (要素還元的) なデータの取り扱いではパーソナリティの研究は進展し得ないとし、パーソナリティはあくまでも全体論的 (ホーリスティック) な研究方法によって取り扱われる必要性のあることが繰り返し強調される。

以上から、マズローのパーソナリティ研究における方法論的特質の主要なものとして、次の 3 点を指摘し得る。

- (A) パーソナリティは諸部分間の高度な相互依存によって組織化されているので、一部分が変化すると他の部分が変化するという連鎖を通じて、全体も変化するというシステム的特性を有する。それゆえ、ゲシュタルト心理学の示すように、要素還元主義によるのではなく「全体論的 (ホーリスティック) な研究方法」が要請されること。
- (B) パーソナリティは同一の「対処目的」を有する諸行動が纏められた集合としてのいくつかの「症候群」から構成され、それら症候群は部分として相互に依存するだけでなく、複数



の下位症候群から成り立ち、さらにその下位症候群は個別の諸症状によって構成されるという「入れ子構造」にあること。

- (C) 人間の主な行動は、パーソナリティの外界に対する「力動的」な表現すなわち内的原因（目的）の結果とみなすことができ、その有り様は、目的を決定する「全てのパーソナリティ症候群」、目的に対する方法を決定する「文化的背景」、および、目的や方法の実現可能性を決定する「直接的状況」に依ること。

これらを総じて言う、「全体論的－力動論的アプローチ」となる。

### Ⅲ. 他の 1943 年論文との関係

これまでみてきたように、1943 年において第 3 番目に発表された論文「パーソナリティ組織の力動性」では、人間行動を内的原因（目的）の結果として説明しようとする力動心理学とパーソナリティの全体性を重視するゲシュタルト心理学とを総合させた研究視点（文化人類学の考え方も含まれる）が示され、特に、パーソナリティのシステムの理解や入れ子構造状の症候群概念が提示された<sup>16)</sup>。

そこで先ずは、このような「全体論的－力動論的アプローチ」の内包と、1943 年において第 2 番目に発表された論文「人間動機の理論」で提示されている「基本欲求」、「欲求階層性」、および「自己実現欲求」との関係について若干言及しよう。

マズローは、基本的な対処目的の同一性にもとづいて、個別の症状をまとめて小さな症候群とし、さらにそれら小症候群をより大きな症候群に纏めることによって、最終的には、相互に独立的大症候群が形成されたとしたが、そのようにして得られる比較的独立性の高い大症候群を、「基本欲求 (the basic needs)」として概念化しようとしたと考えられる。すなわち、1943 年論文「人間動機づけの理論」において示された、①生理的欲求 (the 'physiological' needs)、②保全欲求 (the safety needs)、③愛の欲求 (the love needs; 1954 年著作以降は the belongingness and love needs に変更)、④自尊欲求 (the esteem needs)、および⑤自己実現欲求 (the need for self-actualization) をして、パーソナリティを構成する症候群から得られる主要な基本欲求とし、そしてそれらが相互に依存する組織化された力動的全体として、パーソナリティが措定されたと考えられるのである<sup>17)</sup>。

論文「人間動機の理論」では、これら 5 つの基本欲求は優勢度の順にしたがって階層的構造をなすと主張されたが、この欲求階層説については、論文「パーソナリティ組織の力動性」で示される「全体論的－力動論的アプローチ」から導出することはかなり困難である。確かに、症候群間の関係について一定の議論がみられるものの、それは「階層性」にまで明確に発展されていない。また、症候群概念の説明にあたり「入れ子構造」の指摘がなされているが、それはあくまでも個別の症候群（個別の基本欲求）内部に関するものである。なお、論文「パーソナリティ組織の力動性」においては、最高次の基本欲求としての自己実現欲求に関する言及はみられないが、

このことはパーソナリティの研究方法与それによって得られる所産とは別のものであると、マズローは考えたからと思われる。

他方、1943 年の第 1 番目の発表論文「動機理論序説」では、基本欲求の階層性と自己実現欲求について萌芽的な記述がみられる。この論文は、従来の心理学の研究方法論について疑問を提起し、今後自らが目指すべき心理学（健全な心理学 sound motivation theory と称した）の要件として、次の 12 命題（1954 年以降では 16 命題に増加）を指摘している<sup>18)</sup>。

- (1) 生体の統合的全体性 (the integrated wholeness of the organism) が再び強調されなくてはならない。
- (2) 局所的、身体的、部分的な動因 (drive) を動機理論のパラダイムとしてはならない。
- (3) 動機研究で強調すべきことは、部分目標よりは究極目標 (ultimate goals)、また手段よりは目的 (ends) にある。意識的な動機だけでなく無意識的な動機 (unconscious motivations) が、動機理論の出発点となるべきである。
- (4) 通例、一つの目標に到達するのに文化的に異なった経路 (different cultural paths) がある。それゆえ、動機理論の構築にあたり、根本的で無意識的な目標 (fundamental, unconscious goals) の方が、意識的で特殊的・局所的な願望よりも有益である。
- (5) 動機づけられた行動は、事前的であれ完了的であれ、多数の欲求 (many needs) が表明または充足され得る一つの経路 (a channel) であると理解されなくてはならない。通常の行為は、複数の動機 (more than one motivation) から生じている。
- (6) 生体の状態の殆どすべては、動機づけられていると理解されるべきである。
- (7) 人間は常に何かを欲している動物 (a perpetually wanting animal) である。一つの欲求が現出するかどうかは、直前の状況すなわち他の優勢な諸欲求がどのような状況にあるかに依存する。欲求や願望は優勢度のヒエラルキー (hierarchies of prepotency) の下で配列されている。
- (8) 個別の動因をいくら列挙しても無意味である。動機のカテゴリを行うのであれば、カテゴリのレベルや特殊性についての問題を取り扱う必要がある。
- (9) 動機のカテゴリは、駆動因よりも目標に基づいてなされなくてはならない。
- (10) 動機理論は、動物を中心とするのではなく、人間を中心として形成されるべきである。
- (11) 生体が反応する状況や場が考慮されなくてはならないが、その際、状況や場について力動的な解釈が伴われなくてはならない。
- (12) 生体の統合的な在り方だけでなく、分離的、特殊的、部分的な反応行動も考慮されなくてはならない。

ここで、論文「動機理論序説」と論文「パーソナリティ組織の力動性」との相同性についてふれておくと、前者の(1)(2)は後者の第 1 節・第 2 節と、(3)(4)は第 3 節・第 4 節⑩・第 7 節

と、(5)は第6節と、(8)(9)は第5節①②と、(11)は第7節と、(12)は第8節と、それぞれほぼ同じ内容となっている。

しかし、「動機理論序説」の(6)(7)(10)では、「パーソナリティ組織の力動性」とは異なる内容のものが示され、なかでも(6)(7)が注目される。このうち(6)は(7)に包含されることから、論文「動機理論序説」での独自の点は、(7)に示されるように、人間は絶え間なく欲求する存在であり、基本欲求の出現は優勢度順になされる「階層性」のもとにあるという点に絞られる。すなわち、健全な心理学理論を構築するためには、マズローは、「第一に、人間は相対的ないし段階的な方法 (in a relative or one-step-along-the-path fashion) でしか欲求を充足させることはできないという事実、第二に、諸欲求それ自体が優勢度に基づく階層的配列 (hierarchy of prepotency) をなしているという事実」に対する適切な注目が必要であると主張したのである<sup>19)</sup>。

#### IV. エピローグ

以上みてきたように、1943年時点において、まず第1番目の論文「動機理論序説」では健全な心理学理論の構築諸要件の提示の中で基本欲求の階層性が示され、その連続線上にある第2番目の論文「人間動機の理論」では欲求階層説とともに自己実現欲求が明示され、そしてこれら両論文を貫く研究方法論が第3番目の論文「パーソナリティ組織の力動性」において展開されたのである。

後者の論文のなかでマズローは、従来からの支配的な科学方法論としての要素還元主義はパーソナリティ研究においては適切ではないとし、当時のゲシュタルト心理学 (ゴールドシュタインの生体論を含む) と力動的心理学とを接合させた「全体論的－力動論的アプローチ」を主張したのであるが、それは彼のパーソナリティ研究の基本視座というべきものであった<sup>20)</sup>。

ただし、マズロー特有の「自己実現」概念それ自体の形成については、「全体論的－力動論的アプローチ」を基礎にしつつも、〈新たな視点の付加〉が必要であったと考えられる。それはマズローが、第2論文を1954年著書『人間性の心理学』に収録するにあたり、健全な心理学の構築要件として追加された4項目のうちの「健康人の動機に関する知識 (Knowledge of Healthy Motivation)」において示されている。すなわち、「人間の動機に関するわれわれの知識の殆どは、心理学者からではなく、実際に患者を診ている精神療法医から得られたものである。… (中略) …精神病患者は多くの有益なデータを提供してくれるが、同時にそれは誤謬の源泉 (a great source of error) ともなっている。… (中略) …精神病患者が日常的にもつ動機の在り様を、そのまま健康人の動機を考えるための基本的枠組み (paradigm) にすることは、原則的にも拒否されなくてはならない。… (中略) …いやしくも注目に値する動機理論であるためには、障害者の精神が示す自己防衛的な行動だけでなく、健康で強靱な人の示す最高度の能力 (the highest capacities of the healthy and strong man) についても取り扱わなくてはならない。人間の歴史の中で最も偉大で素晴らしい人々 (the greatest and finest people in human history) が抱いた最重要の関心を、すべ

て包摂し説明しなくてはならない』<sup>21)</sup>と。

実は、マズローはゴールドシュタインが脳損傷患者研究から得た「自己実現」概念を発展させるべく、1945年以降、健常者のもつ基本欲求としての「自己実現」概念に関する調査研究を行うことで、1950年頃までにはおよそその輪郭が描かれている<sup>22)</sup>。すなわち、1950年における論文「自己実現人：心理的健康の研究 (Self-Actualizing People: A Study of Psychological Health)」が1954年著書の第12章として収録されたわけである。しかしながら、「自己実現」概念を援用した経営学者マグレガー (Douglas Murray McGregor, 1906-1964) は、同著書第5章に収録された1943年論文「人間動機の理論」に注目するに止まり、第12章を視野外とした。それゆえ、経営学上の「自己実現」概念は脳病理学者ゴールドシュタインの初期概念を十分脱し得ないままで学界および実務界に流布されてしまった<sup>23)</sup>。そのような不幸な事態を解消するためにも、1959年までにはほぼ到達したと考えられるマズロー独自の「自己実現」概念とそれに伴い改訂された「欲求階層説」に関する考察が必要とされようが、そのことについては別稿の課題としたい。

#### 〈注〉

- 1) 論文「パーソナリティ組織の力動性 (Dynamics of Personality Organization I & II, *Psychological Review* 50: 514-539, 558)」は1943年論文のなかでは第3番目のものであり、それはMaslow (1954) では第3章 (題名: Holistic-Dynamic Theory in the Study of Personality) として、さらにMaslow (1970) では付録B (題名: Holistic-Dynamics, Organismic Theory, Syndrome Dynamics) として、それぞれ一部加筆・削除のうえ収録されている。
- 2) Maslow (1954: ix)
- 3) ゴールドシュタインについては、三島・河野 (2006) を参照のこと。
- 4) Maslow (1954: ix-x)
- 5) Maslow (1943c: 514-519)
- 6) Maslow (1943c: 519-524)
- 7) Maslow (1943c: 524-530)
- 8) 心理的フレーバーという概念は1942年発表の論文でも言及されており、「特定諸症状の多様性のなかに見出される特有な“全体性 (wholeness)” の側面」として使われている。Maslow (1942) を参照のこと。
- 9) Maslow (1943c: 530-539)
- 10) Maslow (1943c: 541-547)
- 11) マズローは、「不安定感 (insecurity)」に対比される「安定感 (security)」の症候群として、①好まれ愛されているという感覚、受け入れられているという感覚、暖かく見守られているという感覚；②所属感、居心地の良好感、集団での存在感；③世間・人生は快く暖かく友好的で好意的で全ての人は同胞であるとの認識；④他の人々は「本質的に」善人で楽しく暖かく友好的で好意的であるとの認識；⑤安心感、脅威・危険・不安を感じないこと；⑥他人に対する友好と信頼の感覚、敵対感のないこと、他人への寛容心、他人に対し優しくなれること；⑦良いことを期待する傾向、何事にも楽観的であること；⑧幸福や満足を感じ易いこと；⑨泰然自若の感覚、葛藤がなく情緒が安定していること；⑩外向的な傾向；⑪自己受容、自己の許容、衝動の受容；⑫他人に対する支配力よりも、むしろ課題に対し力強く適切に対応する欲求、肯定的で堅固な基盤を有する自尊心、力強さの感覚、勇気のあること；⑬神経症や精神病に容易には陥らないこと；⑭アドラー派のいう「社会的関心」、協力的であること、親切心、他人への配慮と同情、

- という 14 の部分症候群を挙げている。Maslow (1942) を参照のこと。
- 12) Maslow (1943c: 548-549)
  - 13) Maslow (1943c: 549-551)
  - 14) Maslow (1943c: 552-554)
  - 15) Maslow (1943c: 554-558)
  - 16) 全体論的-力動論的アプローチの構成要素としてベネディクトの文化人類学が明示されていないが、マズロー理論に対するベネディクトの影響は少なくないことに注意したい。彼女の影響は、パーソナリティ研究の方法論それ自体よりは自己実現概念やそれに関する社会文化の在り方 (= 社会シナジー論) に関するものが多い。Maslow (1954: 152), Maslow (1964), および, Maslow (1967) などを参照のこと。
  - 17) この点については、三島 (2005) を参照のこと。
  - 18) Maslow (1943a: 91) を参照のこと。なお、1954 年以降に付加された 4 命題は、「動機づけられていない行動」、「達成の可能性」、「現実の影響」、「健康な動機づけについての知識」についてである。このうち、「動機づけられていない行動」と「健康な動機づけについての知識」に関する命題は、自己実現欲求の特質に関連するものとして留意すべきものである。
  - 19) Maslow (1943a: 88) を参照のこと。なお、論文「動機理論序説」の「末尾注」では、人間のもつ基本欲求・目標を 5 つ (生理, 保全, 愛, 自尊, および自己実現) に分類すると共に、その基本欲求間に見られる「優劣度は、米国人のなかで多くの人々から抽出された平均的な事実発見 (average findings in a large sampling of our population) による」として、その正当性を主張している。とはいえ、マズローは、このような平均的な欲求階層性の例外 (exceptions to the average hierarchy) や逆階層性 (reversals of order) のあることも自ら認めている。実際に、高次の欲求をもてない人や欲求水準の低い人ばかりか、神経症の人や超自我の強い人が存在するからである。彼の欲求階層説は、人々の一般的傾向を示すものにすぎないことを銘記する必要がある。この点は、Maslow (1943a: 91-92) を参照のこと。また、基本欲求の 5 分類については、三島 (2005) を参照のこと。
  - 20) Maslow (1943a: 92) では、当時近刊予定とされた論文「人間動機の理論」は「ウェルトハイマーのゲシュタルト心理学、ゴールドシュタインの生体論、およびフロム-ラドナー-ホーナイ-カルディナンの精神分析学 (the Fromm-Rado-Horney-Kardiner) の総合である」としているが、当該論文が収録された Maslow (1954: 80) では、「けだし、ジェームズとデューイの機能論の伝統の下で、ウェルトハイマー、ゴールドシュタイン、ゲシュタルト心理学の全体論と融合し、またフロイトやアドラーの力動論とも融合する。この統合や総合は、全体論的-力動論的理論と称することができよう」と記している。なお、Maslow (1970: 35) では、力動論者のなかにライヒ (Reich), ユング (Jung), およびアドラー (Adler) の名前が付け加えられている。
  - 21) Maslow (1954: 79) および Maslow (1970: 33)。なお、別の追加項目: 「動機づけられていない行動 (Nonmotivated Behavior)」では、健康人の示す成長や自己実現は「対処というよりも表出 (expression rather than coping)」として捉える方がはるかに適切であるとして、「欠乏されたものを求めること (seeking for what is lacked)」が通常の意味における「動機づけされた行動」というのであれば、表出としての自己実現は「動機づけられていない行動」として認識すべきであると、マズローは主張する。この点については、Maslow (1954: 76) および Maslow (1970: 30) を参照のこと。
  - 22) ゴールドシュタインの「自己実現」概念については三島・河野 (2006) を、また健康人の有する「自己実現」に関するマズローの探究過程については、三島・河野 (2009) を、それぞれ参照のこと。
  - 23) マグレガーによるマズロー学説の受容については、三島 (2008) を参照のこと。

#### 〈主要参考文献〉

- Maslow, A. H. (1942) "The Dynamics of Psychological Security-Insecurity," *Character and Personality*, 10, pp. 331-344.
- \_\_\_\_\_ (1943a) "Preface to Motivation Theory," *Psychosomatic Medicine*, 5, pp.85-92.



- \_\_\_\_\_ (1943b) "A Theory of Human Motivation," *Psychological Review*, 50, pp.370-396.
- \_\_\_\_\_ (1943c) "Dynamics of Personality Organization I・II," *The Psychological Review*, 50, pp.514-539, 541-558.
- \_\_\_\_\_ (1954) *Motivation and Personality*, Harper & Brothers [小口忠彦監訳 (1971) 『人間性の心理学』産能率短期大学出版部].
- \_\_\_\_\_ (1964) "Synergy in the Society and in the Individual," *Journal of Individual Psychology*, 20, pp.153-164.
- \_\_\_\_\_ (1967) "Self-Actualization and Beyond," In J. F. T. Bugental (ed.), *Challengers of Humanistic Psychology*, McGraw-Hill, pp.279-286.
- \_\_\_\_\_ (1970) *Motivation and Personality (second edition)*, Harper & Row [小口忠彦監訳 (1987) 『[改訂新版] 人間性の心理学』産能大学出版部].
- 三島齊紀 (2005) 「A. H. Maslow の欲求論に関する一考察：正常パーソナリティと基本的欲求 5 分類」, 『研究年報・経済学』東北大学経済学会, 第 66 巻, 第 4 号, pp.209-215.
- \_\_\_\_\_ (2008) 「Maslow 理論の経営学的「受容」に関する一考察：D. McGregor の 1957 年論文を中心に」, 藤本雅彦編著『経営学の基本視座：河野昭三先生還暦記念論文集』まほろば書房, pp.213-229.
- 三島齊紀・河野昭三 (2006) 「ゴールドシュタインの「自己実現」概念に関する覚書：Maslow 理論の初期的形成に関する一考察」, 『研究年報・経済学』東北大学経済学会, 第 67 巻, 第 4 号, pp.147-161.
- \_\_\_\_\_ (2009) 「A. H. Maslow による「自己実現」概念の探究プロセス：GHB ノートと 1950 年論文を中心に」, 『経済貿易研究研究所年報』神奈川大学経済貿易研究所, No. 35, pp.47-66.
- 中島義明・他編 (1999) 『心理学辞典』有斐閣.